

清末小説から 98

2010.7.1

ユゴーの漢訳名囂俄について(下).....	樽本照雄 1
《與子同仇》の原作.....	渡辺浩司13
晩清 <i>Robinson Crusoe</i> 中譯本考略.....	崔 文東19
晩清小説作者掃描(貳拾參).....	武 禔26
	清末小説から18、25、28

渡辺浩司著『清末民初翻譯短篇ミステリ論集』を刊行しました。今まで不明だった原作を指摘しています。今後の研究には不可欠の1冊です。樽本編『商務印書館研究文献目録』もよ

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

ユゴーの漢訳名囂俄について(下)

樽本照雄

韓一字が囂俄を追究する

私が韓一字論文を読んで感心するのは、多くの資料を収集して自分の目で確認しながら論述しているからなのだ。日本の書籍を例にあげている箇所を見る。そこまで探索する研究者は多くはない。

【韓】1884(明治17)年に紫瀾漁長(坂

崎紫瀾)訳演『(仏国革命)修羅の衝』が公表された。それに作者を紹介して「彪吾先生略伝」がある。カタカナでは「ヒューゴ」であって英語の発音に近い。ここから当時の日記者は英語読みを翻訳したと推測できる。その後、日本で通用する訳名は「もはや“hi[ヒ]”という音がなくなり、わずかに“^マユゴー”だけこれはフランス語の発音にさらに近くなった」。

韓一字は、著作(当然ながら中国語)のなかで日本語カタカナの「ヒューゴ」をそのまま使用している。後者の「^マユゴー」は、「ユゴー」の誤植だ(誤植であることを本人に確認した)。

韓一字は、囂俄となった根拠を『修羅の衝』に求めた。風間書房の『明治文化資料叢書』第9巻翻訳文学編に収録されたものにもとづいている。

【韓】「彪吾」の「ヒューゴ」から「囂俄」に漢訳された。

これがすなわち韓一字の提示した結論である(日本語表記について適切ではない説明をしている箇所は省略した)。推測である、と明記していることもつけ加えておく。断定してはいない。

韓は、根拠となる日本語文献をあげている。私が注目する理由である。

『修羅の衢』について検討する。柳田泉によれば、翻訳者は特定できない。

これはいわゆる明治初期の豪傑訳とは違って、逐次訳を文飾したもので、まず訳としてはよい訳というべきであろう。紫瀾が洋語の嗜みがそれほどなかったといえ、原訳者は果して何人であろうか。この頃の自由新聞には英仏語に達した若手の士が多勢いたからわからない。49頁

『修羅の衢』の冒頭に著者と原作について説明がある(傍点、傍線は省略)。

該書は曾て仏蘭西の^{ヒューゴ}彪吾にあらずして彪吾の仏蘭西とこそいふべけれどまで其鴻名を欧米両洲に雷轟せしめたるビクトル、マリー彪吾先生の著述に係れる者にして原名をば「ナインチスリー」と題し之を意識すれば則ち九十三年の義なり。169頁

原書名を見れば底本は英訳本だとわかる。だから著者の名前も彪吾ヒューゴと英語読みになっている。といいながら、

ビクトルはフランス語系なのだ。英語であればヴィクター(あるいはビクター)である。統一されていない。

ユゴーの伝記がつづいており、それを「彪吾先生略伝」と称する。

以上を見れば、たしかに「ヒューゴ」と表記する日本語訳がある。ではそれが囂俄となった決定的な証拠となるかといえ、すぐには賛同することはできない。なぜか。囂俄と漢訳した中国人が『修羅の衢』を確かに読んでいた、ということをも証明する必要が生じるからだ。それは無理だろう。

なにしろ『修羅の衢』は、『自由新聞』に連載されたが、中断したままで単行本にはなっていない。『新小説』の編集者、すなわち囂俄の2文字を当てた人物が、18年も前の新聞に連載された該作品を探し出して読んだらどうか。その可能性は、かなり低いと思う。

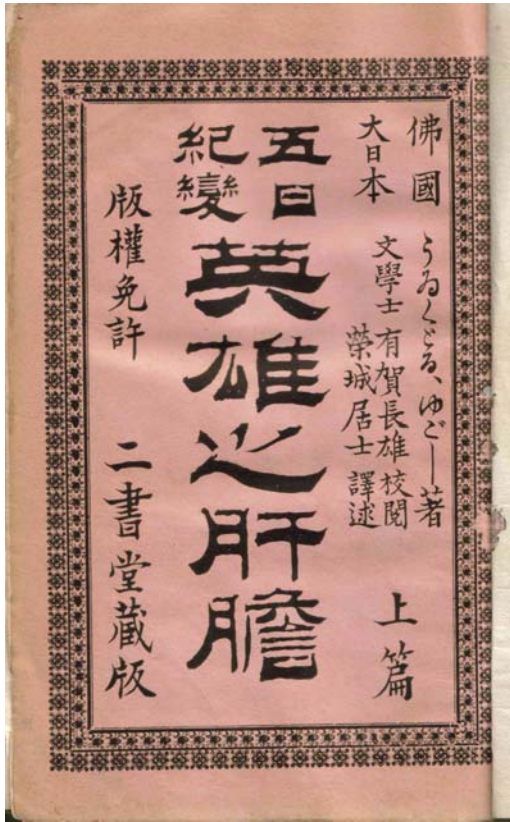
ゆえに、韓一字は推測だと書かざるをえない。韓が慎重に検討していることがよくわかる。彼女が書く内容に信頼性がある、という意味でもある。

私は、次に別の文献を取り出す。

『英雄之肝胆』ほかのばあい ユゴーとヒューゴ

1887(明治20)年に『(五日紀変)英雄之肝胆』上篇(博文堂、文海堂)が刊行された。こちらは単行本だ。

「仏国うみくとる、ゆごー著、大日本文学士有賀長雄校閲、栄城居士[野田藤吉郎]訳述」と表示がある。凡例には、「原書題シテいすとわーるとんくりーむ



即ち罪人ノ歴史ト云フ」と説明される。原文はフランス語 *Histoire d'un Crime* である。だから著者を「ゆごー」と表示して違和感のない表記だといえる。

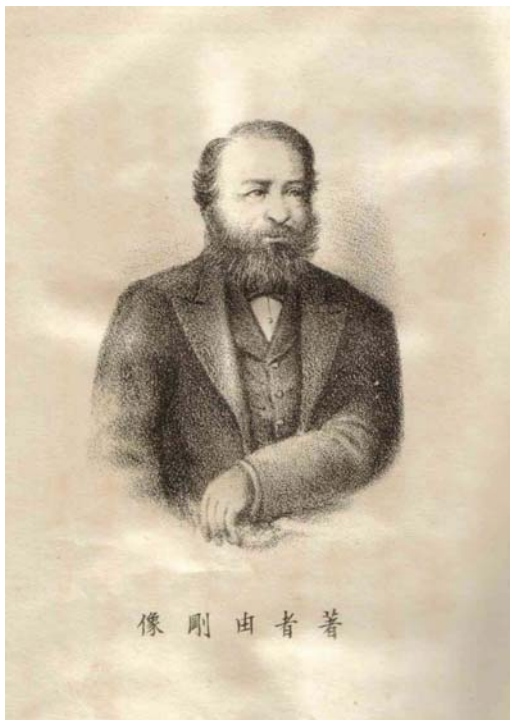
しかも、今村有隣の漢文「序」に「左党代議士由剛」と見える。石印らしい「著者由剛像」を添付する。「由剛」は、カタカナを振れば「ユゴウ」または「ユウゴウ」だ。無理すれば「ユイゴウ」と読めないことはない。だが、わざと無理をする必要はない。

ところが、凡例には「仏国国民代議士うめくとるひゆごーノ著二係ルひゆごー学識該博、文辞胆麗、夙ニ能詩ヲ以テ天下ニ鳴ル」と出てくるのだ。「ひゆごー」では英語系になってしまう。もっとも、こちらの「うめくとる」もフランス語系の読みだから英仏混用だ。『修羅の衝』と同じことをくり返している。

同一作品でユゴーとヒューゴーの両者が使用されている具体例である。

同じく1887(明治20)年に高橋基一著『彪氏愛國偉勲』(東崖堂 明治22.5.4再版)がでた。ユゴーの伝記だ。アメリカで刊行された伝記に触発されたと説明がある。「^{びくとるひうご} 藝古多律彪翹」と表記する。「ひうご」の部分は英語系になる。

日本では初期の段階でのみフランス語系ユゴー(表記ではユーゴー)と英語系ヒューゴーが混在していた。しかし、後には原音を尊重してほとんどフランス語系「ユーゴー」で統一された。そういう状況のなかで、梁啓超らの『新小説』(1902年)が英語系ヒューゴーをわざわざ





ぎ選択したのは、なぜなのか。

ユゴー作品が、ある時期、日本語翻訳を媒介にして中国に移入されたことは確かだ。しかし、その名前が英語系ヒューゴの髑俄である必然性を、日本の翻訳状況から導き出すことはむづかしいように思う。例にあげた日本語翻訳2作品『修羅の衢』『英雄之肝胆』、また伝記の『彪氏愛國偉勳』では、たしかに英語系ヒューゴを示している。しかし、これらを確認とするには根拠が弱い。なにしろ『新小説』よりも15年の時間をさかのぼらなければならないからだ。

人見一太郎の『ユゴー』

『新小説』の編集者は、日本におけるユゴー熱を熟知していた。だからこそ該誌第2号に髑俄の肖像写真と小伝を掲げ

たと考える。

題名がないからその短い伝記をかりに「髑俄小伝」としよう。私はこれに注目する。中国にユゴーを紹介した初期の短文であることがひとつ。彼の経歴を簡潔に説明している。もうひとつは、英語系のヒューゴである髑俄を当てた最初の例であるからだ。

短文だから全訳する。説明するつごうから部分的に番号を から まで振る。

ヒューゴ[髑俄]は、千八百二年生まれ、千八百八十五年死去。十九世紀の最も著名な小説家、戯曲家である。若くして神童と目され、十六歳の時フランス学士会院(学士会院とはフランス文学の集まる場所である)の懸賞に応じ、詩一首を投じて一世を驚かせた。その後著作はますます多く、各国ともに争って翻訳しないものはなかった。ヒューゴは文学家であるばかりでなくまた大政治家でもある。晩年は国民議会議員となり建白するところが大いにあった。死去するとフランス人は光栄にも国葬の礼をとった。年齢八十三。

根拠となる文献があり、それをこの短文に凝縮したと思われる。

私がここで提出するのは、人見一太郎『ユゴー』(民友社1895.5.13/1906.6.12四版)である。いうまでもなく梁啓超の『新小説』第2号よりも先に刊行されている。

上記「露俄小伝」の番号にあわせ、人見の「ウ井クトルユーゴ一年譜」と本文から引用する(【人見】と示す。傍線省略)。

【人見】千八百二年 二月廿六日
仏蘭西ベサンソンに生る。1頁

西暦の表示が中国語と日本語がまったく同じだ。当たり前だといわれるかもしれない。だが、『修羅の衝』では「一千八百零二年」と表記する。中国語ではこちらの方になじみがある。

【人見】彼れは先天的に文才を享けて生れ、六歳にして、ウ井ルヅルを誦し、七歳にしてポルテール、ルーソーを読み。『ドコツト』中学に入る日は、彼れの文才已に著く発暢し居れり。42頁

人見の説明は具体的だ。それを「露俄小伝」がまとめて「若くして神童と目され」と漢訳するのも可能だろう。

【人見】千八百十七年 仏国学士会の懸賞詩に応じて奇才一世を驚かし……2頁

この部分をそのまま漢訳(詩一首を投じて一世を驚かせた[投詩一首驚倒一世])したと思われる。しかも、次の に見る注に対応する人見の説明もある。

【人見】仏国学士会は、……実に
仏国文学界の中央政府と謂ふ可し、

47頁

にもどって疑問を提出しておく。「露俄小伝」において、1817年にユゴーは「十六歳」だと説明している。これは数え年だ。疑問というのは、この「露俄小伝」でも享年八十三としているこの「八十三」は満年齢である。数え年と満年齢を混用した。人見の文章にはない「十六歳」を加筆して数え年で示すのは『新小説』の編集者がおかした不注意ではないか。

【人見】千八百七十年 二十年の流より巴里に帰へり、国民議会の代議士に撰挙せられ主戦論を主張す。6頁

中国語の「国民議会議員」が人見の「国民議会の代議士」に似ている。

【人見】千八百八十五年 八十三年を以て没し、国葬を以て貧民の柩車にてパンテオン寺に葬る。6頁

「国葬」と「八十三年」が共通する。人見の『ユゴー』と『新小説』の「露俄小伝」が似ていることを指摘した。すると、奇妙なことに気づく。日本語原文がフランス語系「ユゴー」でなぜ漢訳が英語系の「露俄[ヒューゴー]」なのだろうか。

人見『ユゴー』にはユゴーの肖像写真は収録されていない。略伝が人見本にもとづいているとしても、写真は別の刊

行物からとったと考えられる。

次に示すのは、梁啓超が漢訳するユゴーだ。今までのどれよりも早い。罽俄が出てくる前である。

梁啓超のばあい 姚哥

梁啓超は、徳富蘇峰の文章を翻訳したことがある。その時、蘇峰の名前を明記しなかった*12。

徳富蘇峰「インスピレーション」(『国民之友』第22号1888.5.18)から該当する文章を引用し、梁啓超の訳文「烟士披里純(INSPIRATION)」(『清議報』第99冊 光緒二十七年十月廿一日(1901.12.1))と並置する。あとで出てくる文章と関連するのでご注目いただきたい。

【蘇峰】吾人は嘗つてユゴーの語を聞く曰く、婦人は弱し、然れとも母は強しと、夫れ弱き婦人にして、母となれば、何故に強きや、唯た其幼児を愛する愛の一念は、柔弱なる婦人、即ち薄の穂のそよにも、魂を驚かす婦人にして、虎狼吼へ、魍魎出没する千山万壑の中に独往独来して、更に意とせざるが如き大胆なる勇気を生するにあらずや、至誠は神明に通す凡そ真面目になり、(後略)

【梁啓超】西儒姚哥氏有言「婦人弱也。而為母則強」WOMAN IS WEAK, BUT MOTHER IS STRONG 夫弱婦何以能為強母。唯其愛兒至誠之一念。則雖平日嬌不勝衣。情如小鳥。而以其兒之故。可以独往独来于千山万壑

中。虎狼吼咻。魍魎出没。而無所於恐。無取於避。蓋至誠者人之真面目。而通於神明者也。

梁啓超は、蘇峰の文章をほとんど逐語訳している。ただし、蘇峰の原文にはない英語を挿入した。woman と mother がふたつながら冠詞をともなわずにむき出しになっている。

そういえば、論文題名も同じく「烟士披里純(INSPIRATION)」と英語を加筆したのだった。原文である日本語のカタカナを音訳しただけではなんのこともわからない。読者の理解を補助するための英語表示だろう。

「女は弱いが母は強かった The woman was weak, but the mother found strength.」。ユゴーのこの有名な語句は、『九十三年』が出典だ*13。行方のわからなくなった3人の子どもを死にもものぐるいでさがす母親がいる。城塞ラ・トゥーグルをめざして脇目もふらず歩きつづける。その様子を説明して「女は弱いが母は強い」ということばになった。

梁啓超は、英語を文中にはさんだから英語を頭の中に描いている。しかし、著者名については蘇峰のフランス語系「ユゴー」*14をそのまま「姚哥」と漢訳した。この部分だけを見ると、突然にユゴーが登場したように見える。ただし、蘇峰の原文には、「ユゴーか「ミゼラブル」に於る」と説明する箇所もあるのだ。梁啓超は、この部分を漢訳しなかった。梁は省略したが、蘇峰の原文を読んでいる。ここから、梁啓超は少なくとも

ユゴーの「ミゼラブル」については題名だけでも知っていたことがわかる。しかも、蘇峰がそこでユゴーに並べてあげた例は「ミルトンの「天国失墜」に於る、杜甫の蜀中の詩に於る、施耐菴が水滸伝に於る」などの文学作品だ。梁啓超は、ユゴーが文学者であったことを知っていたと考えていいだろう。梁啓超の漢訳した姚哥が、囂俄の前に提出されている点には私は注目する。

『新小説』に出てきた囂俄とくらべてしまう。そこには矛盾があることに気づく。

梁啓超は、ユゴーを姚哥と早くから表記していた。だが自分の主宰する『新小説』誌上では、英語系ヒューゴーである囂俄が使用された。梁自身が提示したフランス語系ユゴー〔姚哥〕はどこに行ってしまったのか。梁啓超は姚哥を使うようになぜ主張しなかったのか。この肝心のところが、わからない。結果として、梁啓超は囂俄を黙認したことになるのだ。

私から見れば、訳語について梁啓超のグループ内で一貫していない。不統一である。しかも、囂俄と翻訳した人物は梁啓超ではありえない。

姚哥と表示する例は、別の書物にも見ることができる。

人名辞典を思いついた。中国で編集発行された外国人についての辞典に掲載されているのではないか。日本では実藤文庫にそれらしい書物3種類があった。

『外国尚友録』『泰西各国名人言行録』『各国名人事略』だ。そのなかのひとつにユゴーが出ている。探せばほかにまだ

あるかもしれない。今はひとつだけにしておく。

張元輯『外国尚友録』（明達学社 光緒壬寅（1902）歳冬*¹⁵。石印本）である。刊行年を見ると梁啓超の「烟土披里純」よりも遅い。この辞典を見て驚いた。ユゴーを紹介して不思議な現象がある（巻4の3オ）。引用する（句点をほどこした）。

姚哥 西儒姚哥氏有言。婦人弱也。而為母則強。夫弱婦何以能為強母。唯其愛兒至誠之一念。則雖平日嬌不勝衣情如小鳥。而以其兒之故。可以独往独来于千山万壑中。虎狼吼咻魍魎出沒。而無所於恐無所於避。太矣哉。熱誠之愛之能易人度也。（下線樽本）

文豪ユゴーについてその人物、あるいは経歴を説明しているのかと思えば、そうではない。広く知られた「婦人は弱し、然れとも母は強し」の意味を説明しているだけ。子供を愛するがゆえに、どのような恐怖にもうち勝つことができるのが母親だ、と。ユゴーと名前をだしてはいる。しかし、彼がフランスの文豪であることは、これではわからない。ユゴーを紹介する文章にはなっていないのだ。

それにしても奇妙なことだと感じる。上記の文章を見てほしい。蘇峰が書いた「婦人は弱し、然れとも母は強し」を梁啓超は漢訳してそのままだった。この『外国尚友録』の字句は、梁啓超の翻訳「烟土披里純」の一部分と下線部分を除

いてまったく同じである。

文章発表の時間的順番を見れば、『外国尚友録』の記述は、梁啓超の翻訳にもとづいている。

これにはまだ続きがある。注に示した夏曉虹「從“尚友録”到“名人伝略”

晚清世界人名辞典研究」に興味深い箇所がある。それによると、上に引用した姚哥についての文章(『外国尚友録』収録)は、梁啓超の「論進取冒險」から取ったというのだ。梁啓超の該文は『新民叢報』第5号(1902.4.8)に掲載されている。見ると、書き直した下線部を含んで確かに同一文章であった*16。

記述の流れを示すと次のようになる。

徳富蘇峰の「インスピレーション」は、梁啓超によって漢訳され「烟土披里純(INSPIRATION)」になった。梁啓超は、蘇峰の示した「ユーゴー」を「姚哥」と表記する。これがはじまりだ。梁は、その一部分を「論進取冒險」に再び利用する。『外国尚友録』が、それにもとづいてユゴー部分を引き写した。

ここまで調べていうことができるのは、以下のことだ。

結 論

蠶俄より前に姚哥があった。私は、この事実に着目する。

当時の日本では、フランス語系ユゴーが圧倒的に多く使用されていた。その環境にいた梁啓超が、ユゴーを姚哥と漢訳したのはまったく自然である。時間の順序からいっても蠶俄よりも姚哥が先行して出現している。姚哥の方がユゴーの漢

訳として定着する可能性が高かった。私はそう考えるのだ。しかし、事実はそのようではなかった。

蠶俄という漢訳が誰によってなされたのか。さかのぼって特定するための資料が不足している。

いくつかの推測をすることができる。

ひとつ。『新小説』掲載の「蠶俄小伝」は、無署名だから該誌編集者の手になるだろう。日本の文献に拠っていると私は考える。だが、そのことと著者ユゴーの漢訳名とは関係がない。

もうひとつ。蠶俄という英語系の漢訳に、梁啓超が関与しているとは考えられない。くり返すが、彼はそれより以前に姚哥の2文字を使用しているからだ。

さらに、英語系ヒューゴーを漢訳して蠶俄とした中国人は、南方出身の人物だと推測する。

施蟄存は、林紓が福州方言を使用して蠶俄に漢訳した、と書いた*17。だが、林紓と蠶俄はもともと無関係なのだ。施蟄存の誤解である。

蠶俄の「蠶」が「ヒュー」に該当するとすれば、問題は「俄」だ。これを(日本語で表わせば)「ゴ」と発音するのは、北方方言ではないように思う。福州方言でなければ、それ以外の南方方言となる。

『新小説』において「蠶俄小伝」を書いた人物は、人名のフランス語原音にこだわっていない。あるいは、日本で一部に使用されたことのあるヒューゴーを知っていたかもしれない。だが、ユゴーがフランス人であろうとなかろうと、写真に添えた原語 Hugo を英語読みにした。

結局のところ日本で広くフランス語系ユ
ゴーが採用されていた状況に左右されな
かったのだ。独自に露俄を当てた。

ユゴーの肖像写真と同時に出現した
「露俄」は、視覚的に強く当時の中国人
に印象づけられた。写真の威力を見せつ

けられる気がする。ゆえに、梁啓超の
「姚哥」を押しつけ、それ以後長い間使
われることになった。後世にあたえたそ
の影響力は、大きかったといわなければ
ならない。 罫

資料1：日本語訳ユゴー略表

人名表記を比較するために作成した。出版社、掲載月日などの詳細は省略している。

参照資料

- 木村毅、齋藤昌三『西洋文学翻訳年表』岩波書店1933.7.5。岩波講座世界文学
柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷
榊原貴教編『明治期翻訳文学書全集目録 (マイクロフィルム版)』ナダ書房1988.8.20
国立国会図書館近代デジタルライブラリー

- 1884 (明治17)年『(仏国革命)修羅の衝』Ninety Three
ビクトル、マリー彪吾(ヒューゴ)(坂崎紫瀾訳演) 49頁
- 1885 (明治18)年『(仏乱余聞)霜夜の月』同上 63頁(訳者不詳)
- 1887 (明治20)年『(五日紀変)英雄之肝胆』Histoire d'un Crime
うみくとる、ゆごー(野田藤吉郎訳)うみくとる、ひゆごー
今村有隣の漢文「序」に「左党代議士由剛」とある。石印の著者由剛像にも収録されてい
る 56頁ユーゴウ 86頁「フランス語からの直接訳」 55頁
『彪氏愛国偉勲』 空古多律彪翻(びくとるひうご)(高橋基一)
『(名士遭難)政界之暴風』
53頁 ユーゴー(眉嶺山樵訳) 86頁(井上勤)
『(寸断分裂)美人之腸』Les Misérables
53頁 ユーゴー(烏金山人訳) 105頁(井上勤)
- 1888 (明治21)年「インスピレーション」ユーゴー(徳富蘇峰)
- 1888 (明治21)年「随見録」Chose Vues 180頁 ユーゴー(森田思軒訳)
- 1889 (明治22)年『探偵ユーベル』Hubert 154頁 ユーゴー(森田思軒訳) 58頁
『渡海難』 155頁(朝比奈知泉訳)
- 1890 (明治23)年「クラウド」Claude Gueux 181頁 ユーゴー(森田思軒訳)
- 1891 (明治24)年『探偵ゆーべる及くらうど』 60頁 ユーゴー(森田思軒訳)
- 1892 (明治25)年『懐旧』Bug-Jargal ウ井クトル、ユーゴー(森田思軒訳) 181頁 60頁
- 1893 (明治26)年『依緑軒漫録』 ヴヱクトル・ユ・ゴ・(無腸道人著)伝記
- 1894 (明治27)年『A B C 組合』 65頁 ユーゴー(抱一庵訳)
- 1895 (明治28)年『ユ・ゴ・』 ウ井クトルユーゴー(人見一太郎著)評伝
- 1896 (明治29)年「弥生の夕」 66頁 ユーゴー(残月庵訳)
「初あらし」 66頁 ユーゴー(松華庵主人訳)

	「水冥」篇	66頁 ユーゴー (抱一庵主人訳)
	「死刑前の六時間」 Le Dernier jour d'un Condanné	ユーゴー (森田思軒訳) 66頁 181頁
1898 (明治31)年	『ユーゴー小品』	ウ井クトル (またはウヰクトル)、ユーゴー (森田思軒訳) 62頁
1902 (明治35)年	『A B C 組合』	ユーゴー (抱一庵主人訳述) 63頁

資料2 : ユーゴーの漢訳名一覧

清末民初時期においてユーゴーがどのように漢字表記されているのか。それを見る目的で作成した。ゆえに初出のみを示す。原著者名を表示している作品を採録した。発行年月日順。出典は省略している。網羅しているわけではない。

- 西儒姚哥氏 梁啓超「烟土披里純 (INSPIRATION)」『清議報』第99冊 光緒二十七年十月廿一日 (1901.12.1) [徳富蘇峰「インスピレーション」『国民之友』第22号1888.5.18]
- 西儒姚哥氏 梁啓超「論進取冒險」『新民叢報』第5号 (1902.4.8)
- 西儒姚哥氏 張元輯『外国尚友録』明達学社 光緒壬寅 (1902) 歳冬
- 法国大文豪囂俄 Victor Hugo (「図画」、有評)『新小説』第1年第2号 光緒二十八年十一月十五日 (1902.12.14)
- 雨苟 V.Hugo (2頁) 馬君武「茶余隨筆」所収の「菲律賓之愛国者」『新民叢報』第27号1903.3.12
- 雨苟 Victor Hugo、雨苟者 (割注: 一作囂俄) 法蘭西之大文豪也 (6頁) 馬君武「欧学之片影」所収の「十九世紀二大文豪」『新民叢報』第28号1903.3.27
- (法) 西余谷著 冷血 (陳景韓) 訳「遊皮」『偵探譚』第1冊 時中書局 光緒癸卯 (1903)
VICTOR HUGO “ HUBERT, THE SPY ”。 “ THINGS SEEN ” 原題 CHOSÉS VUES 所収。ユーゴー原作、思軒居士訳「探偵ユーベル」『国民之友』第37号附録-第43号1889.1.2-3.2。思軒居士「訳文探偵ユーベルの後に書す」該誌第44号1889.3.12 (森田思軒重訳『ユーゴー小品』民友社1898.6.4所収)
- (法) 囂俄著 庚辰 (魯迅) 訳「哀塵」『浙江潮』5期 光緒29.5.20 (1903.6.15)
VICTOR HUGO 著。ウヰクトル、ユーゴー著、森田文蔵訳「フハンティーン Fantine のもと (一千八百四十一年)」『国民之友』第26号1888.7.20 (森田思軒重訳『ユーゴー小品』民友社1898.6.4所収)
- (法) 大文豪囂俄著 蘇子穀 (曼殊) 訳「惨社会」11回『国民日日報』癸卯8.18 (1903.10.8) - (12.3)
VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ” 1862。11回で中断。後、惨世界、悲惨世界と改題
- (法) 大文豪囂俄著「無声剣」『国民日日報』1903.11.29
VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ” 1862
- (法) 囂俄著 蘇子穀 (曼殊)、陳由己 (独秀) 合訳『惨世界』14回 上海・鏡今書局1904
VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ” 1862 惨社会
- 由哥 「文壇勇將阿密昭拉伝」『大陸報』1904
- (法) 囂俄原著 天笑生 (包公毅) 訳述『侠奴血』小説林総発行所 乙巳11 (1905)
VICTOR HUGO “ BUG-JARGAL ” 1826
- (法) 囂俄著 会稽平雲 (周作人) 撰 小説林総編訳所編輯『孤児記』上海・小説林総発行所 丙午6 (1906) 小説林小本小説1=1
- ユーゴー「哀史」第10-11章 クロード・グーより多くとる。VICTOR HUGO “ CLAUDE GUEUX ” 1834.7
- (法) 囂俄原著 天笑生 (包公毅) 訳述「鉄窗紅涙記 (哲理小説)」『月月小説』1年1号-2年6期 (18号) 光緒32.9.15-戊申6 (1906.11.1-1908.7)

- VICTOR HUGO “ LE DERNIER JOUR D'UN CONDAMNÈ ” 1829。ユーゴー作、思軒居士訳「死刑前の六時間」『国民之友』第309号附録-335号(1896.8.15-1897.2.13)(森田思軒重訳『ユーゴー小品』民友社1898.6.4所収)
- 「図画」法国大小説家囂俄結婚時代小影 / 囂俄之夫人夏墜児結婚時代小影 『小説林』第1期 光緒三十三年(1907)年正月
- (法)囂俄著 商務印書館訳「孤星淚(砺志小説)」2冊 商務印書館 光緒33.6(1907)
- VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ”
- 胡戈 『世界名人伝略』1908
- 許峨 『近世六十名人』世界社1908
- (法)囂俄著 冷血(陳景韓)訳『賣解女兒』小説時報1910
- VICTOR HUGO “ NOTRE-DAME DE PARIS ” 1830
- (法)囂俄原著 冷(陳景韓)訳「聾裁判」『小説時報』4期 宣統2.3.1(1910.4.10)
- VICTOR HUGO “ NOTRE-DAME DE PARIS ” 1830
- (法)大文豪囂俄著 平情居士(狄葆賢)訳「噫有情」70章『小説時報』7-9期 宣統2.10.1-3.3.20(1910.11.2-1911.4.18)
- VICTOR HUGO “ LES TRAVAILLEURS DE LA MER ”
- (法)囂俄著 (包)天笑、(徐)卓呆訳『犠牲』秋星社1910.12
- VICTOR HUGO “ ANGELO ” ユーゴー作、佐藤紅緑訳「犠牲」『文藝俱樂部』1909.4
- (法)囂俄著 東亜病夫(曾孟樸)訳「九十三年(法国革命外史)」『時報』1912.2.21-9.14
- VICTOR HUGO “ QUATREVINGT-TREIZE ” 1874
- (法)囂俄著、高君平訳「妙齡，贈彼妹也」『国学叢選』第3集 1913
- VICTOR HUGO 著
- (法)囂俄著 (廖)旭人訳「英雄鑑(短篇小説)」『庸言』1卷9号1913.4.1
- VICTOR HUGO 著
- (法)囂俄著 陸紹棠訳述「倩女魂(怨情小説)」『新神州雜誌』1期1913.5.15
- VICTOR HUGO 著
- (法)囂俄著、高君平訳「夏之夜二章」『国学叢選』第6集1914
- VICTOR HUGO 著
- (法)囂俄原著 東亜病夫(曾孟樸)訳「銀瓶怨(新劇)」『小説月報』5卷1-4号1914.4.25-7.25
- VICTOR HUGO “ ANGÈLO ” 項日棠
- 囂俄著 商務印書館編訳所訳「孤星淚(砺志小説)」2卷 上下冊 上海商務印書館1914.8小本小説
- VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ”
- (法)囂俄VICTOR HUGO著 解吾訳「天民淚(社会小説)」『娛閑録』22期1915.6上
- VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ” 1862
- (法)囂俄著 孝宗訳「怪客(名家小説)」『小説時報』28号1916.9
- VICTOR HUGO “ LES MISÉRABLES ”
- (法)囂俄著 東亜病夫(曾孟樸)編訳「梟歎」上海・有正書局1916.9
- VICTOR HUGO “ LUCRÈCE BORGIA ” 呂克蘭斯鮑夏
- (法)維克都・囂俄著 周瘦鵑訳「貧民血」『瘦鵑短篇小説』下冊 上海・中華書局1918.1
- VICTOR HUGO 著
- (法)VICTOR HUGO原著 雪生訳「縹緲盟心」『小説月報』9卷7-8号1918.7.25-8.25
- VICTOR HUGO “ CLAUDE GUEUX ” 1829
- (法)囂俄(雨果) 周瘦鵑訳「熱愛」『先施樂園日報』1918.8.9以降?-1919以前
- VICTOR HUGO 著

- (法) 預勾著 林紓、毛文鍾訳「双雄義死録」上海商務印書館1921.10 説部叢書4=12
VICTOR HUGO “NINETY-THREE”。原著“QUATRE-VINGT-TREIZE”1874
- (法) 露俄著 蘇子穀(曼殊)、陳由己(独秀)合訳「悲惨世界」14回 上海・泰東圖書局1921.10.1
/ 1927.7四版 / 1929.4五版
VICTOR HUGO “LES MISÉRABLES” 1862 惨社会
- (法) 露俄著 俞忽訳「活冤孽」上中下冊 上海商務印書館1923.4 / 1933.3国難後1版
VICTOR HUGO “NOTRE-DAME DE PARIS” 1831
- (法) 露俄Victor Hugo作 曾樸(曾孟樸)訳「呂伯蘭(RUY BLAS)(名家戯劇)」『学衡』37-38期
1924.12-1925.1
VICTOR HUGO “RUY BLAS”
- 兩谷 H.Pauthier著、王維克訳『法国文学史』1925
- (法) 露俄著 東亜病夫(曾孟樸)編訳『呂克蘭斯鮑夏』上海・真美善書店1927.9 露俄戯劇全集6
VICTOR HUGO “LUCRÈCE BORGIA” 梟歟
- (法) 露俄原著 東亜病夫(曾孟樸)訳『欧那尼』上海・真美善書店1927.9
VICTOR HUGO “HERNANI”
- (法) 露俄著 東亜病夫(曾孟樸)編訳『鐘楼怪人(露俄歌劇)』上海・真美善書店1928.11
VICTOR HUGO “LA ESMERALDA”
- (法) 露俄原著 東亜病夫(曾孟樸)訳『頂日樂』上海・真美善書店1930.4.15 露俄戯劇全集第八種
VICTOR HUGO “ANGÈLO”] 銀瓶怨
- (法) V.HUGO著 曾樸(曾孟樸)訳「笑の人」『真美善』季刊1卷1-2号1931.4-7
VICTOR HUGO著

ユゴー作品ではないがユゴーと表示するもの

- (法) 岳珂著 毋我口訳 覚奴筆述「岩窟王(西史小説)」『娛閑録』1期-2卷3号1914.7-1915.9.16
(韓一字「不是VICTOR HUGO的作品,是 ALEXANDRE DUMAS père 的 LE COMTE DE MONTECRISTO,共100章,未完」)

【注】

- 12) 樽本「梁啓超の盗用」『清末小説から』第20号清末小説研究会1991.1.1。『清末小説探索』所収。ただし初出の対照表は省略している。
- 13) Frank Lee Benedict. *NINETY-THREE* Harper & Brothers, Publishers, New York, 1874. p.298. また, Mrs. Katharine E. Megee. *NINETY-THREE* University Publishing Company, New York and New Orleans, 1897. p.137. 雨果著、鄭永慧訳『九三年』(北京・人民文学出版社1957.5 / 1978.4吉林第1次印刷。また、同社1992.6北京第6次印刷。378頁)では、「女人固是脆弱,母親却是
- 堅強的」とする。
- 14) 徳富蘇峰は、「ユーゴ」と書いたことがある。「チエルの革命史よりも、ユーゴの『九十三』によりて、革命の真相を知る」「歴史小説」「文学漫筆」民友社出版部1898.10.27 / 1911.2.15八版。74頁。ついでながら、梁啓超は「烟土披里純(INSPIRATION)」において、蘇峰の書くルーソーを盧騷と盧梭の2種類に漢訳している。
- 15) 実藤文庫所蔵。「光緒二十八年壬寅之秋」と明記する福格斯「序」および「明治35年4月」の副島種臣撰「序」(金井之恭書)が収録されている。ついでながら、金井之恭の次男は、秋蘋

金井雄だ。曾孟樸と面識があった。該書は日本人を含んでいる。本文のはじめに掲げられるのが「東漢掬」だ。日本語では「やまとのあやのつか」と読むらしい。つづいて「豊臣秀吉」がきて「蒙的斯鳩」すなわちモンテスキューという順番になっている。

- 16) 夏曉虹は該論文において『外国尚友録』の姚哥部分には書き間違い4カ所があると説明している(73頁/14頁)。ところが、私の見る『外国尚友録』には書き間違いは、ない。版本が異なるのか。理由は不明だ。梁啓超の「烟土披里純」と「論進取冒險」の関係について、夏は「也説梁啓超的盜用」(『清末小説から』第22号1991.7.1)において触れている。夏曉虹『覚醒与伝世 梁啓超の文学道路』(上海人民出版社1991.8)所収の「第9章“欧西文思”与“欧文直訳体”」を参照のこと。
- 17) 施蛰存「導言」(『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集1(施蛰存主編)上海書店1990.10)

渡辺浩司著 清末小説研究資料叢書12
清末民初翻訳短篇ミステリ論集

B5判 145頁 限定200部 定価:2,100円
イギリスの「碧斯東」とは誰のことでしょうか？
「瑪黎瑟勒勃朗」は誰？ 「埃倫阿布瓦特」は？
あの作家が中国では一九一〇年代に早くも翻訳されていました。

卓越した頭脳を持つ「王登生」とは誰のことでしょうか？
「諾佛姆白喬」は誰？ 「裘迭絲李」は？
あの主人公が中国では二十世紀初頭にすでに姿を見せていたのです。

現在でも有名な作家・よく知られている作品から、現在では有名とも言えない作家・ほぼ忘れられている作品まで、翻訳ショート・ストーリーのみをとりあげた稀有な書物です。旧稿十一篇に書き下ろし一篇を加え、もちろん旧稿の誤りは訂正し、さらに図をちょっと増やし、主な固有名詞の索引も付けました。短篇作品の多様な姿をどうぞお楽しみ下さい。

《與子同仇》の原作

渡辺浩司

1

《小説月報》第七卷第二号(商務印書館,1916年2月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》)を使用、影印本は奥付が無く、発行年月日は『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)による)に《與子同仇》なる短篇小説が掲載された。書名の下に“原名For Belgium / 原著者I.I.Bell”とあり、原作・著者名ともに明記されている。この作品の正確な著者名及び掲載誌が判明したので、本稿で報告する。

正しい著者名は、J.J.Bell(Jonh Joy Bell)である。Bellは、1871年生、1934年没のイギリス(スコットランド)の作家で、詩や劇等も含め、60以上の著作がある*1。

原作名には誤りはなく、掲載誌は『The Strand Magazine』Vol.50-No.296(1915年8月)である。これが初出であるかどうかや後に著作に収められているかは不明である。本稿では、『The Strand Magazine』から訳されたとして論を進める。

FOR BELGIUM

By
J·J·BELL
Illustrated by
DUDLEY TENNANT

TOWARDS midnight the rain ceased, the air seemed to become suddenly colder. A thin fog gathered on the Belgian plain surrounding the village which, like so many others, had recently suffered a senseless bombardment. To the village now so silent came fitfully the dull booming of distant guns and the ceaseless murmur of a swollen river.

In one of the houses still habitable, though damaged as to its front apartments, a dark-haired young woman stood by the kitchen dresser, in the light of a couple of candles, and read, not for the first time, a letter which, apparently, had been folded originally into the smallest possible compass. She was a handsomely-built young woman, and her present pallor and patent anxiety scarcely detracted from the charms of her features. Her lips moved to the written words, as though she were learning them by heart, which, as a matter of fact, she had done hours ago. At last she refolded the letter, put it carefully in her bosom, and, shaking her head, murmured: "Long past the hour. He will not come now. He dare not. The good

Vol. I.—28

God grant that they have not captured him." She began to pace the floor, her head drooping, her fingers locked in front of her.

The kitchen was spacious but barely furnished. The Prussians in occupation of the village during the past three weeks had helped themselves—giving receipts, of course. A broad dresser with racks of dishes and a tall cupboard stood against one wall; a stove projected from the wall opposite, wherein was a door leading to the rest of the house. The door to the yard was placed between wide, squat windows draped with dark-coloured curtains, which, however, were undrawn. Under one window stood a table with a red cloth; under the other a sewing-machine of the sort that may be worked by hand or foot. A coarse rug lay in front of the stove, another in the midst of the flagged floor. There were cracks in the walls and window-panes.

The young woman did not pace the floor for long. With a start she stopped short, all on the alert. But her glance reached the nearer window a fraction of a second too late to detect a man's face being withdrawn. As she stood listening intently the door was cautiously opened. A young soldier, his

訳者“鐵樵”は、憚樹珏のことで、原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没、著訳者でもあり、《小説月報》の編集責任者でもあった。魯迅の初めて公にされた小説《懷舊》を掲載し、称賛したことで知られる。

2

『For Belgium』のあらすじを述べる。

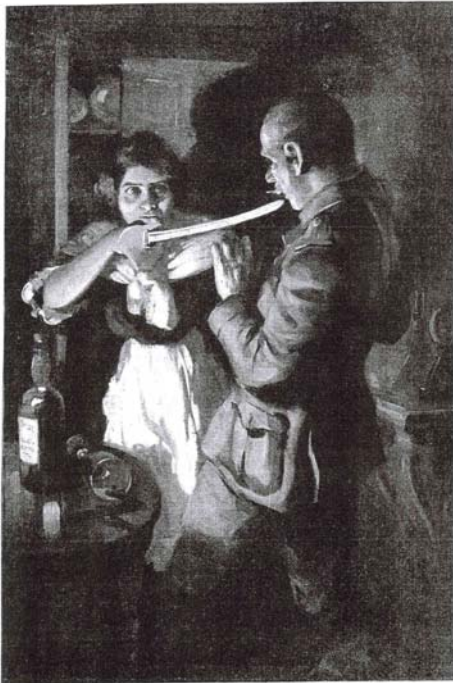
ドイツ占領下のベルギーのある村で、夜遅く若い女性(Louise)が手紙を読みつつ、その差出人(Jules)が来るのを待っていた。戦闘で被害を受けた彼女の家にもドイツ兵が泊まっており、深夜にその兵が戻る前に、差出人の彼が来ることになっているのだが、遅れていた。二人は恋人同士で、彼はベルギーのために戦っており、数週間ぶりに会うのであった。

ようやく到着したJulesは、ずぶぬれで泥だらけで、ドイツ軍の歩哨が二倍になったので遅くなったと話し、Louiseに手伝うよう頼み、作業を始めた。Julesと戦死したLouiseの兄Jacquesが埋設したケーブルを床下から掘り出し、ミシンに接続した。これは橋の仕掛け爆弾につながっていた。彼は、村を解放するために三千名の兵が待機していることや深夜にドイツ軍の補給が橋を通ることを話す。更に、準備完了を知らせに行き、またここに戻ってくるが、自分が間に合わなければ、教会の鐘が合図なので、ミシンのハンドルを動かし、ベルギーのために爆弾を爆破させてくれとLouiseに託した。

Julesは家を出、彼女は無事を祈るが銃声がした。そこに、ドイツ兵(Blutner)

166

THE STRAND MAGAZINE.



"WITH THE SOLDIER'S POINT AT HIS THROAT SHE PUNCHED HIM TO RETREAT."

が帰ってくる。男は召使にワインを要求するが、返事はなかった。再び要求すると、彼女が立ち上がり、召使は死んだことを伝え(朝早く水を汲みに家を出た所、スパイと間違われ射殺されていた)、ワインを運ぼうとする。男は忘れていたと言い、自ら運んだ。男が彼女に遅くまで仕事をしている等と話しかけると、彼女は自分の部屋には雨が吹き込み、暖房用燃料も少なく、明日、別の家を探すつもりだと答える。男は、明日には出発し、誰もこの家には泊まらせないといい、ドイツはすべて補償すると言う。すると、彼女は、父は酔った兵士に殺され、兄も砲撃で殺され、母と弟はオランダで物乞いをしている、妹は行方不明で、婚約者はない、ドイツはこのすべてにどうやって補償するのかと尋ねる。男が、戦争に苦しみと悲しみは付き物だと言うと、彼女は、ドイツ兵は皇帝達から涙以外何も残さぬよう教えられているのは本当か等と尋ねる。責められた男は自制しつつ、ドイツの勝利は涙を乾かすと答えるが、彼女が、ドイツのできることは殺しと破壊と盗みだけだ、騎士道精神はドイツのせいでは滅びるだろう等と言う。その間、男は数回黙るよう言い、そして彼女に近づく。男は、時間はたっぷりある等と言い、規則に反し、カーテンを閉め、ドアをロックする。男は、この後、新兵器が到着すれば、付近の敵兵は一掃される等と言い、更に彼女に近づく。彼女は、男が置いていた剣を取り、男ののどにつきつける。男はミシンを覆っていた布を取り、腕に巻いて、彼女から剣を奪い取る。

男が笑いながら彼女に近づき、「もう降参しろ、さもなくば私の」と言いかけた時、ガーンと音がした。男の顔から笑いが消え、ドアの方へ向かった。彼女はすばやくミシンに向かった。それがあまりに速かったため、男は仕掛け爆弾だと気づき、ハンドルへと伸びる彼女の手を見る。彼女が抵抗し、男が一瞬ひるんだすきに、ベルギーのための行動がなされた。

閃光がきらめき、男が呆然と立つ中、大きな震動が建物を揺るがせた。男が彼女に詰め寄り、それは何かと詰問すると、彼女は大声で笑い出し、「Vive la Belge!」等と言った。男が彼女を荒々しく捕まえた時、銃声とラッパが響いてきた。血のにじむ布を頭に巻いたJulesが家に飛び込んで、銃を構えた。Louiseは彼の腕に飛び込み、Blutnerは泣きそうな顔で両手を挙げた。

全九頁のうち、三頁半が絵、半頁がタイトル・著者名・絵師名なので、かなり短い作品である。舞台が家の中だけなので、一幕物の劇と見ることもできる。中立なのに攻撃されたベルギーを応援する内容になっており、誰もが傷つく戦争の悲惨さを描いている。

3

中国語訳について述べる。人物の表情の描写に少し省略が見られるものの、筋を追ってうまく訳していると思う。

改訳(或は誤訳)部分を示す。冒頭にある村の占領期間である。

The Prussians in occupation of the village during the past three weeks had helped themselves giving receipts, of course. (161頁右)

(三週間に渡り村を占領しているプロシア人らは自給自足であったもちろん、接収した物の書付を(村民に)与えていた。)

蓋此地爲德軍占有。已三閱月也。(1頁下,句点は原文のまま,以下同)

(この地がドイツ軍に占領され、すでに三か月経ていた。)

原作の三週間が、中国語訳では三か月に延びている。中国語訳には“三星期”(三週間)としている所もあり(3頁下)、矛盾が生じている。

また、同じ冒頭での加筆を指摘しておく。中国語訳には以下の記述がある。

村中居民。扶老攜幼。避地而去。(1頁上)

(村中の住民は、老若を助けて、難を避け村から去っていた。)

原作には、村の住宅がかなりの被害を受けているのがわかる記述があり、Louiseの台詞に母と弟がオランダに物乞いに行ったとある。しかし、住民が疎開したという記述は無い。この加筆から、当時の中国では、攻撃を受けた場合、村(家)を捨てて避難し、村(家)には留まらないとするのが一般的だったことが見て取れる。

もう一か所大きな改訳を挙げておく。最後にJulesがLouiseの家に飛び込んでくる場面である。

Running footsteps the door burst open.

“Hands up, devil!”

Jules, his head bound in a bloody rag, stood there, revolver levelled.

Louise, breaking away, flew to the shelter of his left arm and hid her face on his muddy breast.

In a stiff, mechanical fashion, Blutner's arms went up. He looked as if he were going to cry. (169頁右)

(入口の階段を駆け上がり ドアが荒々しく開いた。

「手を挙げろ、悪魔め！」

Julesが頭に血染めのぼろきれを巻いて、そこに立ち、銃の狙いをつけていた。

Louiseは逃げて、安全な彼の左腕に飛び込み、顔を泥まみれの胸に埋めた。

ぎこちない機械のような動きで、Blutnerの両手が拳がった。男は泣き出しそうにも見えた。)

傑而司應聲至。手短槍。頭裹布。血被其面。孛路瞥見。急起迎敵。傑而司連擊以槍。遂倒地。不能起。須臾。死矣。(7頁上 - 下)

(傑而司は(彼女の)声に応えて現われた。手には銃を持ち、頭には布を巻き、その表面は血に染まっていた。

亨路(德)はそれを見るや、慌てて立ち向かおうとした。傑而司は銃を続けざまに撃った。(亨路德は)倒れ、立ち上がれず、すぐに息絶えた。)

原作はBlutnerを殺していないが、中国語訳は射殺してしまった。訳者は、捕虜にするのはもの足りないとも考えたのであろうか。

書名について、原題は『For Belgium』(ベルギーのために)となっている。しかし、中国語訳は《與子同仇》(あなたと敵をともしにする)であり、上記の最後の改訳と同じく、原作に忠実ではない感じがする。

4

中国語訳末尾(7頁下)には、訳者であり、該誌編集責任者でもある惲樹珏の興味深い付記が見られる。その中で、連合国側には、拳国体制維持のために小説の果たす役割があり、そこに小説家の占める場所ができていて、だが、中国では、皆ばらばらで、何の意図も無く、たわ言ばかりだと述べている。そして、

本報今注意逡譯歐戰小説。

(本誌はこれから意を持って欧州大戦の小説を翻訳する。)

と述べる。更に、翻訳に頼る不満も述べつつ、ドイツ側の戦争小説を募集すると述べている。

中国の小説雑誌が、西洋の一つの事件(第一次世界大戦)について、それに関連

した小説を特集すると明言したのは画期的なことだと思う。その先駆けの一つとして、原作『For Belgium』発表(1915年8月)から半年で、編集責任者自身により翻訳された《與子同仇》は内容以上の価値を持つものと思う。

5

上の編集方針に基づき発表されたと思える、同号掲載《海底危険之新防禦物》に言及しておく。該作は小説部分に載っており、書名の下に“Cleveland Meoffett 原著”、“銘三”(訳者)とある。

この原作は、『A New Defence against the Submarine』(『The Strand Magazine』Vol.49-No.294,1915年6月,掲載 - これが初出かどうかは不明)で、正しい原著者名は、Cleveland Moffettである*2。

Cleveland (Langston) Moffettは、1863年生、1926年没のアメリカのジャーナリスト・作家である。第一次世界大戦に関しては、前線からレポートしたり、ドイツによるアメリカ侵略を描いた『The Conquest of America』を著したり、The American Defence Societyの組織化を援助する等々、積極的に関わっていた。

この『A New Defence against the Submarine』はレポートで*3、小説ではない。タイトルの下に以下のようにある。

The story of a remarkable invention which promises not only to revolutionize sea-warfare, but to add greatly to the safety of all ocean travel. (653頁)

(海戦を劇的に変えるだけでなく、航海全体の安全に大きくプラスになる、注目すべき発明の話)

小説ではないので、中国語訳の検討はせず、原作の指摘だけに留めておく。 罍

【注】

- 1) Bell作品の最初の日本語訳は、管見の及ぶ限りでは、ユーモア短篇『青い樽』(訳者不記、『新青年』第十一巻第一号、博文館、1930年1月1日、掲載)である。但し、原作は未詳。
- 2) 日本では、リドル・ストーリーの傑作とされる『The Mysterious Card』(1896年)の作者として知られている。
- 3) Moffett著の同種のレポートとして、目に付いたものに以下がある。
『Steered by Wireless』, 『McClure's Magazine』 42-5(1914年3月)掲載
『The Newest Terror in Warfare』, 『McClure's Magazine』 44-5(1915年3月)掲載

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》
浙江古籍出版社, 1993年5月

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》
中華書局, 1997年2月

Dumas Malone編『Dictionary of American Biography』 13, Charles Scribner's Sons, 1934年

『Who Was Who among English and European Authors 1931 - 1949』 1, Gale Research Company, 1978年

『Who Was Who in Literature 1906 - 1934』 1, Gale Research Company, 1979年

G・K・チェスタトン編, 宇野利泰他訳
『探偵小説の世紀 上』 東京創元社, 1983年12月2日 G.K.Chesterton編『A Century of Detective Stories』 Hutchinson, 1935年の選訳

押川曠編, 秋津知子訳『シャーロック・ホームズのライヴアルたち』 早川書房, 1984年2月29日/2000年9月15日二刷

山前讓編, ミステリー文学資料館監修
『探偵雑誌目次総覧』 日外アソシエーツ, 2009年6月25日

「J・J・ベルに就いて」 - 『宝石』 第十二巻第一号, 宝石社, 1957年1月1日

William G.Contento管理HP「The Fiction Mags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2010年3月24日確認)

『明清小説研究』 2009年第4期
2009発行月日不記

《海上奇書》与《海上花列伝》
小説的報刊化写作何 宏玲

晚清《新世界小説社報》出版時間、
主編考辨謝 仁敏

清末民初白話報刊小説大家許劍胆考論
.....胡 全章

黃人字号寓意考章 琦

晚清 *Robinson Crusoe* 中譯本考略

崔 文 東

英國小説名著 *Robinson Crusoe* 可謂家喻戶曉，流行不衰。該書實有三部，*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (1719，以下簡稱《漂流記》)，*The Farther Adventures of Robinson Crusoe* (1719，以下簡稱《續記》)，*Serious Reflections of Robinson Crusoe* (1720)。通常 *Robinson Crusoe* 專指流傳最廣的第一部，其餘兩部則少有人讀。

在晚清，該書前兩部開始進入中文世界，倍受歡迎，為當時中譯本最多的域外小説之一。樽本照雄先生編著的《新編增補清末民初小説目錄》(以下簡稱《目錄》)共收錄九部中譯本，分別為：1902年，《絕島漂流記》*1；1902-1903年，《魯濱孫漂流記》*2；1905年，《魯濱孫漂流記》*3；1906年，《魯濱孫漂流續記》*4；1906年，《絕島英雄》*5；1909年，《無人島大王》*6；1909年，《荒島英雄》*7；年份不詳，《絕島漂流》*8；1910年，《絕島日記》*9。

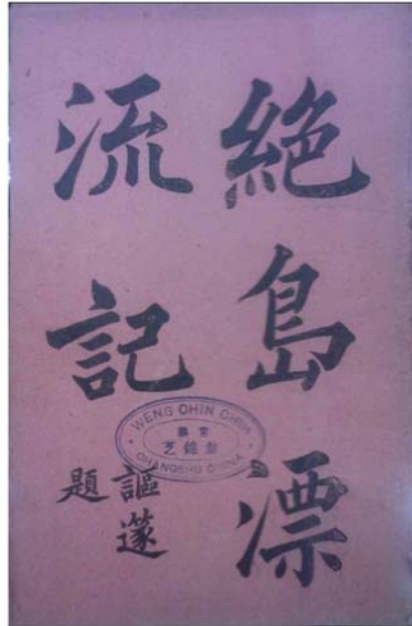
由於條件限制，樽本先生的目錄存在訛誤與不足之處。筆者在此依據第一手資

料加以修訂與補充。

《絕島漂流記》(並非“飄”)

筆者所見為上海圖書館及南京圖書館藏本，鉛印綫裝，正文署錢唐跋少年筆譯，版權頁署著書者英國狄福，繙譯者錢唐沈祖芬，印書所杭州慧蘭學堂，發行所上海開明書店，光緒二十八年(1902)出版發行。正文前有高鳳謙(夢旦)序及沈祖芬譯者誌。譯者根據英文原著翻譯，襲用了高橋雄峰譯《ロビンソンクルーソー—絕島漂流記》(1894)的書名。根據譯者誌，該譯本完成於戊戌仲冬(1898年11月)，經譯者兄長沈祖緜(甦民)幫助才得以出版。高鳳謙(夢旦)序寫於光緒二十八年(1902)五月二十日，該譯本應出版於此後不久。《目錄》依據賈植芳、俞元桂主編《中國現代文學總書目》，還列有1902年文明書店版，據筆者查考，此版本並不存在*10。

根據沈祖緜(甦民)著先弟誦先事略，沈祖芬弟子包夢華著沈跋公傳及洪銓著沈先生傳(見《錢塘沈氏家乘》卷2)，可以瞭解沈祖芬的生平。沈祖芬，浙江錢塘人，字子淵，號誦先，生於1879年。三歲得足疾，行走不便。但他天資聰穎，自幼接受儒家傳統教育，並學習傳統醫術，學有所成。甲午戰爭中國敗於日本，令他深受震動。1895年，其父執湯壽潛路經上海，認為中國戰敗，原因在於不知外情，勉勵沈祖芬學習西學，從語言文字入手。沈祖芬從此盡棄所學，刻苦學習英文，譯著甚多，並先後在上海、蘇州、揚州等地學堂擔當教習，育人無數。1910年病逝於揚州。沈祖芬的譯作，除《絕島漂流



記》，尚有《香山樂府》(譯英)、《戈登傳》(譯本)、《華盛頓傳》(譯本)(見《錢塘沈氏家乘》卷7)、《希臘羅馬史》(見《絕島漂流記》封底 實學社發行各書 廣告，署錢唐跛公)。沈祖芬是中國翻譯Robinson Crusoe的第一人，也是較早從事中詩英譯的中國翻譯家。但是其它譯著似乎並未保存下來。

《絕島漂流記》分為二十章，包括《飄流記》(第一至十三章)，《續記》(第十四至二十章)兩書內容。譯者並不在乎是否忠於原著，一面大量刪減內容(如魯濱孫的宗教信仰)，又改動、增飾情節(如添加魯濱孫為父母上墳)。不過，譯者完全保留了原著第一人稱敘事。此外，譯者非常注重語言的可讀性，在譯本完成後，“自愧孤陋，無以動閱者之目，就正於膠城夏子彈八，斧削既就，付之手民”(頁1)*¹¹。

《魯賓孫漂流記》(並非“濱”)

《魯賓孫漂流記》(第一期目錄中題為《魯賓孫漂流記演義》)刊載於《大陸報》第一至四，及七至十二期(1902年12月至1903年3月，1903年6月至10月)之小說欄，每期連載兩回，標為“冒險小說”，未連載完。原著者署德富，未標明譯者。1904年至1905年，該譯本曾被重慶《廣益叢報》轉載*¹²。

《大陸報》於1902年12月9日在上海創刊，由戢翼翬主持，秦力山、楊廷棟、雷奮等擔任筆政，這些成員均是資產階級革命派、留日回國學生。筆者認為，秦力山很可能是該譯本譯者，理由如下：一、譯者識語 與譯文列舉專有名詞時中英文並用。《大陸報》主筆中，只能確知秦力山通曉英文，曾摘譯英人 W. E. Hall 所撰之公法(《清議報》第79冊，1901年5月18日)，從美人 James Bryce 所著 *The American Commonwealth* 書中譯出 北美合眾國驅

逐華人憲法一章（《清議報》第80冊，1901年5月28日），秦力山其他文章中列舉專有名詞時也習慣中英文並用。戢翼翬、楊廷棟、雷奮等人當時及之前均從日文編譯西方政法名著，沒有從英文翻譯作品。二、譯者深受梁啟超思想，尤其是《新民說》影響，主筆中唯有秦力山是梁啟超弟子。1900年自立軍事敗後，秦力山逐漸轉向革命，但是與梁啟超依然關係密切，並為《清議報》撰稿。三、《國民報》曾刊登秦力山著《暴君政治》一書不日出版英文廣告一則，該書內容包括：1. 中國必須徹底革命 2. 敘述滿人虐漢歷史，舉揚州十日、嘉定三屠為證 3. 批評清朝九代諭旨 4. 滿清刑罰之黑暗 5. 暴虐政治史實 6. 滿洲詳記 7. 中國人之特性 8. 自傳*13。該書未見出版，但除第8項，其他內容在譯著中均有體現。

《大陸報》正文前附有譯者識語，譯者強調：“原書全為魯濱孫自敘之語，蓋日記體例也，與中國小說體例全然不同。若改為中國小說體例，則費事而且無味。中國事事物物皆當革新，小說何獨不然？”但是，譯者的聲明完全名不副實。首先《大陸報》譯本並非完全譯自原著，第一至四回人名與地名均附有英文，情節較沈譯更接近原著，應該據原著節譯，接下來的部分則全部抄襲沈譯（第一至十六回《飄流記》內容，第十七至二十回為《續記》內容）。其次，譯者也沒有保存原著體例，而是改為白話章回體小說。譯者開始保留了魯濱孫的第一人稱敘事，但是很快出現了說書人套語，且“話分兩頭說”，插入書中其他人物的視角。譯者並不在乎原著的文學性，僅僅視其為宣傳工具，譯

本語言較粗糙，有時文白夾雜。該譯本可能受到日本“政治小說”和中譯的影響，借人物之口大發議論，添加大量內容，借此宣傳新民說，倡導排滿革命*14。

《魯濱孫飄流記》、《魯濱孫飄流續記》

兩書均署英國達孚原著，閩縣林紓、長樂曾宗鞏同譯，均標為“冒險小說”，分上下兩卷，先後於1905年、1906年由上海商務印書館印行。《魯濱孫飄流記》前有林紓序言，該書相繼納入《說部叢書》、《小本小說本》、《林譯小說叢書》、《萬有文庫》，流傳極廣，再版次數在林譯小說中名列前茅。《魯濱孫飄流續記》無序言，該書先後收入《說部叢書》、《林譯小說叢書》，再版次數遠不及前者*15。

林紓、曾宗鞏依據原著翻譯，完全保留了原著的形式特徵和第一人稱敘事，只是在開篇冠以“魯濱孫曰”而已。極少刪減內容，非常忠實。基督教內容也完全譯出，甚至加以注釋。不過，林紓在序言中用中庸之道來解釋魯濱孫的冒險經歷與宗教信仰，譯文中也滲入儒家倫理道德思想*16。

當時商務印書館的廣告對兩書主要內容和賣點有扼要介紹：

《魯濱孫飄流記》：此書故泰西名構，振冒險之精神，勗爭存之道力，直不啻探險家之教科書，不當僅作小說讀。行世之本極多，而人幾於家置一編，雖婦孺亦耳熟能詳，而惟英國達孚所著為尤善。我國舊有譯本，惜渾譯大意，不及全書十分之二（筆者按，指《絕島漂流記》）。今此編譯筆仍出閩縣林君琴南之手。敘次有神，寫生

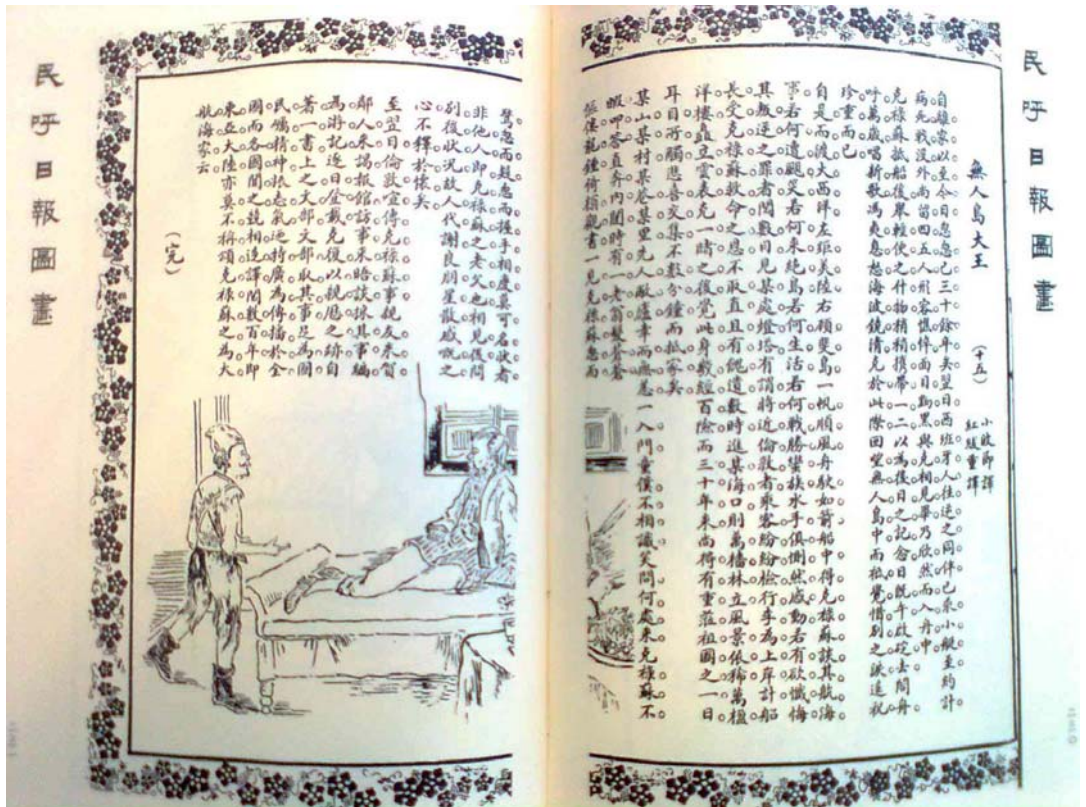


魯濱孫飄流續記卷上

英國達字原著

閩縣林野同譯
長樂會案筆

英譯中有一語百凡肯足引以為喻。其言曰：凡人自傳鐘中。嘆。長。成。者。必。不。能。脫。縣。而。逃。是。語。也。證。之。吾。生。之。行。事。無。有。更。確。於。是。者。矣。無。論。何。人。知。余。歷。艱。辛。三。十。五。年。與。百。種。不。稱。意。之。事。蓋。歷。數。人。間。無。一。人。如。我。者。我。乃。一。均。實。之。箱。此。重。苦。以。後。不。死。而。歸。享。不。安。傳。福。者。又。七。年。可。謂。百。物。皆。備。於。我。然。吾。身。亦。漸。老。矣。在。法。如。吾。者。處。常。人。中。亦。云。實。深。世。故。因。是。復。知。人。間。何。種。足。以。圖。生。者。余。前。書。所。敘。人。人。咸。知。余。酷。嗜。浪。遊。而。浪。遊。之。獲。福。前。書。又。歷。叙。之。凡。茲。壯。壯。之。思。載。余。腦。中。磨。鍊。久。宜。爭。銷。郵。都。歸。於。平。實。縱。使。穩。心。猶。熱。亦。正。如。嚼。火。之。微。烟。余。已。六。十。有。一。矣。願。乃。復。萌。壯。心。而。過。念。冒。險。餘。生。此。必。似。不。宜。動。因。時。時。逼。其。念。不。求。多。於。世。即。使。增。余。一。千。之。金。鈔。何。足。益。余。之。富。況。余。知。足。且。難。習。其。有。餘。以。余。預。料。斷。備。之。



欲活，吾知足觀者之望矣。*17

國後第二次復出航海，重蒞前島，詢知西班牙人督眾與生番鏖戰，獲男婦凡數輩。又舟行抵馬達加斯島，舟人

《魯濱孫飄流續記》：書敘魯濱孫返

因挑少婦啟釁，襲擊土人，焚毀村舍等事。摹寫戰時情狀，均極生動酣烈，有聲有色。其後兼敘魯濱孫遊歷至我國中。采風紀俗，語含諷刺，虽多失實，亦未始不可借為針砭。^{*18}

《絕島英雄》

筆者所見為中國國家圖書館藏本。該書未標明原著者，編譯者署從竈，標為“冒險小說”，光緒三十二年（1906）四月出版，上海廣益書局發行，為文言譯本，共十六章。《目錄》據阿英《晚清戲曲小說目》收入該書，視其為《飄流記》中譯，誤。經筆者查對，該書實為桜井鷗村譯《絕島奇譚》（1902）中譯本，原著為英國作家 Frederick Marryat 的小說 *Masterman Ready; Or, The Wreck of the Pacific* (1841)。

當時，《絕島奇譚》尚有另一中譯本，《海外天》，封面署昭文徐念慈譯，正文署英國馬斯他孟立特著，東海覺我譯，標為“冒險小說”，光緒二十九年（1903）五月印刷，同年十月發行，發行者常熟海虞函書館，印刷所上海文明書局，發行所開明書店、文明書局、廣智書局。該書十六回，白話章回體。《絕島英雄》序言部分譯自《絕島奇譚》序言，《海外天》沒有翻譯序言，可見兩書先後翻譯自日譯本，沒有因襲關係。

《絕島飄流》

《目錄》所收《絕島飄流》為《童話》叢書第一集第四冊，孫毓修編譯，上海商務印書館發行，未標明出版年份，對照第一集其他作品出版時間，應是發行於

1909年。筆者未見到此版本，所見譯文收入盛巽昌、朱守芬編著《百年兒童文學名家譯作精選：外國小說》（上海東方出版中心2001年版），錄自《少年雜誌》第3卷第4號（1913年9月）。《目錄》視之為《飄流記》中譯，誤，該白話譯本改編自瑞士作家 Johann David Wyss 的小說 *Der Schweizerische Robinson* (1812，一般譯為《瑞士家庭魯濱孫》)。

《無人島大王》

1909年6月13日至27日連載於《民呼日報》第30至44號圖畫版，署小波節譯，紅絨重譯，每期配一插圖。該譯本所據原本為巖谷小波譯《無人島大王》（1899），故署小波節譯。紅絨即湯紅絨，為晚清較活躍的女性翻譯家。《民呼日報》圖畫版曾大量刊登其花鳥畫，部分署名及鈐記為“仁和湯絨”，可知其為浙江仁和人。她精通日文，譯作均譯自日文。其生平則尚不瞭解，郭延禮先生稱其為留日學生，但未提出證據^{*19}。湯紅絨的譯作還有《旅順土牢之勇士》（押川春浪原著）、《女露兵》（龍水齋貞一原著）。

此外，湯紅絨還譯有《朝鮮故事龍宮使者》，1909年5月16日至30日連載於《民呼日報》第2號至15號圖畫版，署紅絨女史譯，近於神話寓言故事。其創作則有《短篇小說鶴熊夜話》署甕，1909年6月1日至2日連載於《民呼日報》第18至19號圖畫版，近於動物寓言；《滑稽小說蟹公子》，1909年6月28日至8月11日連載於《民呼日報》第45至89號圖畫版，署紅絨女史著，近於譴責小說，敘述蟹公子不學無術而仕途通達的故事。

《旅順士牢之勇士》、《女露兵》先後收入《旅順雙傑傳》(世界社1909年版)*²⁰，王瀛州編《愛國英雄小史(下編)》(上海交通圖書館1918年版)及波羅奢館主人編《中國女子小說》(上海廣益書局1919年2月版);《龍宮使者》、《無人島大王》、《鶴熊夜話》後收入《紅絨女史三種》一書(1909年民呼畫報本)*²¹。

《無人島大王》依據日譯縮寫本翻譯，為《飄流記》故事梗概，第三人稱敘事。此外，譯者將魯濱孫叛父私逃變成父母為其說動，同意冒險，而且魯濱孫返國時父親健在，父子相認。結尾處，魯濱孫“自著一書，上之文部，文部取其事足為國民礪精神，振志氣，迺特廣為傳播於全國”(頁308)。譯者追求典雅的文筆，多處使用中國典故，如“四面之楚歌”(頁221)，“黃梁一覺”(頁240)，“亞夫將軍”(頁294)等*²²。

《絕島日記》(*The Journal of Robinson Crusoe*)

周砥譯述，1910年5月上海群益書社發行，為青年英文學叢書(Juvenile English Literature)第一編，《目錄》並未標出該書原著。筆者所見為第二版，1923年上海群益書社發行。正文題為《無人島日記》(*The Journal of Robinson Crusoe*)。該書為英漢對照讀物，僅涵蓋《飄流記》中魯濱孫荒島日記部分，譯文及註釋均為文言，譯者生平不詳，封面標為善化周砥譯述，可知為湖南善化人。該註釋本譯自英日對照讀物《無人島日記》(*The Journal of Robinson Crusoe*)，菅野德助、奈倉次郎譯註，1907年東京三省堂發行，為青年英文

學叢書(Juvenile English Literature)之一。

《荒島英雄》

此譯本並未正式發行。《祖國文明報》第80期(1909年7月17日)雜文欄刊載了趙韋俠著《冒險白話小說荒島英雄序》、東亞散人張弼臣著《荒島英雄小說序》，第81期(1909年7月31日)雜錄欄刊載了有虞著《荒島英雄序》，對此譯本有所介紹。據序言可知其為《飄流記》白話體譯本，原著者譯為利科，袁妙娟(袁女史妙娟)翻譯，趙韋俠刪潤，漢光校對。《冒險白話小說荒島英雄序》提到“小說遲期增刊”，但是該刊一直未刊登這一小說。罣

【注釋】

- 1) 樽本照雄編《新編增補清末民初小說目錄》，濟南齊魯書社2002年版，頁363。
- 2) 同上，頁432。
- 3) 同上，頁432。
- 4) 同上，頁432-432。
- 5) 同上，頁363。
- 6) 同上，頁743。
- 7) 同上，頁288。
- 8) 同上，頁363。
- 9) 同上，頁363。
- 10) 《中國現代文學總書目》有多處失誤，《目錄》沿襲之。如《目錄》列入屠格涅夫著，藍文海譯述《父與子》，啓明書局，1896年。該書實初版於1936年3月，1948年和1949年重版(第三版)。見平保興，關於《父與子》的出版年代，《圖書館雜誌》2007年第8期，頁79-80。

- 11) 關於該譯本內容詳盡的論述，參見崔文東，政治與文學的角力，《翻譯學報》2008年第2期，頁101-103；李今，晚清語境中漢譯魯濱孫的文化改寫與抵抗：魯濱孫漢譯系列研究之一，《外國文學研究》2009年第2期，頁99-109。
- 12) 筆者未能見到《廣益叢報》原件，此處據上海圖書館編《中國近代期刊篇目彙錄第二卷上冊》，上海人民出版社1979年版，頁819，821。
- 13) 馮自由《革命逸史初集》，中華書局，1981，頁97。
- 14) 詳見崔文東，政治與文學的角力，頁104-106；李今，晚清語境中的魯濱孫漢譯：《大陸報》本《魯濱孫飄流記》的革命化改寫，《中國現代文學研究叢刊》2009年第2期，頁1-14。
- 15) 樽本照雄編《新編增補清末民初小說目錄》，頁432-433
- 16) 詳見崔文東，政治與文學的角力，頁108-110。
- 17) 錄自陳大康 晚清《新聞報》與小說相關編年(1906-1907)，《明清小說研究》2008年第1期，頁176。
- 18) 同上，頁180-181
- 19) 關於其簡介，參見郭延禮，十世紀第一個二十年近代女性翻譯家群體的脫穎，收氏著，《文學經典的翻譯與解讀》，山東教育出版社2007年版，頁177-181；沈燕，20世紀初中國女性小說作家研究，上海師範大學碩士論文，2004，頁71-74。
- 20) 筆者未能得見此版本，此處據阿英編《晚清戲曲小說目》，中華書局1960年版，頁139。
- 21) 筆者未能見到此版本，此處據《晚清戲曲小說目》，頁84。
- 22) 本節譯文均引自黃季陸主編《中華民國史料叢編·民呼日報(影印本)第一冊》，中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會1969年版，文中直接標註頁碼。
- 陳建華『從革命到共和：清末至民國時期文學、電影與文化的轉型』
桂林·廣西師範大學出版社2009.10
- “革命”話語的轉型與“話語”的革命轉型
從清末到1920年代末
- 孫中山“革命”話語與東西方政治文化考辨
關於“革命”的歷史化與“後設”
詮釋問題
- 民族“想像”的魔力 重讀梁啟超《論小說與群治之關係》
- 拿破侖與晚清“小說界革命” 從《泰西新史攬要》到《泰西歷史演義》
- 《申報·自由談話會》 民初政治與文學的批評功能
- 共和憲政與家國想像 周瘦鵑與《申報·自由談》，1921-1926
- 中國電影批評的先驅 周瘦鵑《影戲話》讀解
- 格里菲斯與中國電影的興起 1920年代通俗文學與電影的整合及其文化政治
- 現代文學的主體形成 以周瘦鵑《九華帳里》為中心

晚清小说作者扫描 (貳拾叁)

武 禧

(一一八)

吴蒙

小说创作：《学究新谈》

吴蒙：(未见资料。待考)

(一一九)

侠

小说创作：《女侠客》

江宝衍：(生卒年、籍贯不详)字侠庵，简署侠。1907年6月21日创办《农工商旬报》，从第24期改名《农工商报》，从第55期有改名《广东劝业报》。每月三期，每期20页。馆设广州光雅里。该刊以方言作实业劝导，内容多关于农业及其改良。其出版广告说：本报宗旨“因为世界艰难，志在讲明生财好法，俾大家撈翻起世界。文字文俗兼用，务求浅白有趣，俾睇报者一见就明”。其内容有论说、新闻、新法、学理、讲古仔、讲道德、新笑谈、广告、高等荐人馆等。其中的“高等荐人馆”栏，给求职者找工作、厂家招工、学校聘教职员等提供了一条新途径。1910年(宣统二年)停刊。1931年编译日本学者关于先秦

经籍的研究文章41篇，分总论、《周易》、《尚书》等11类。附录仓石武四郎《淮南子考》，武内义雄《影宋百衲本史记考》、《桓谭新论考》，书名《先秦经籍考》。书前有编译者《先秦经籍考提要》。1934年翻译有日本本田成之《经学史论》。1938年翻译日本青木正儿《南北戏曲源流考》。

(一二零)

中原浪子

小说创作：

中原浪子：(未见资料·待考)

(一二一)

黄小配

小说创作：《廿载繁华梦》

黄世仲(1872-1913)：广东番禺人。生于广东番禺大桥乡。字小配，别号禺山世次郎，禺山次郎，世次郎。笔名黄帝苗裔，配工、世界一个人、老棣、棣孙、棣。出身书香世家，当到黄世仲一辈已经败落。1883年与兄黄伯耀到佛山帮助父亲在纸厂记账和管理事务。1885年入读佛山书院。曾三次参加科举考试落第，而代人入场当枪手却告成功。1894年与兄黄伯耀赴南洋谋生，于某赌馆当书记。经常向鼓吹维新思想的《天南新报》投稿。曾参加兴中会的外围组织“三和堂”。1905年在孙中山的监誓下加入“同盟会”。执掌香港分部的交际和庶务。负责联络各地会党和工商学界。曾任香港《中国日报》记者。又帮助郑贯公创办《世界公益报》《有所谓报》《广东日报》。1907年自创《少年报》。又创办《广东白话报》《岭南白话杂志》《粤东小说林》《中外小说林》等。曾先后策

动驻粤湘军反正，参加黄花岗起义。辛亥革命成功后，与廖仲愷、陈少白等被各界代表推选为广东军政府枢密处参议，任民团局局长。被孙中山以临时大总统名义颁发葆许状的《南越报》，其长篇连载小说和政论多出自黄世仲之手。1912年被广东军伐陈炯明以“私购军火、图谋不轨”等三项罪名诬陷，被秘密处决。创作小说有《岑春煊》《朝鲜血》《陈开演义》《大马扁》《党人碑》《廿载繁华梦》(一名《广东繁华梦》)《广东世家传》《广东乱事记》(一名《五月风声》)《宦海升沉录》(一名《袁世凯》)《洪秀全演义》《洪杨豪侠传》《宦海潮》《宦海冤魂》《黄梁梦》《黄萧养演义》《镜中影》《南北夫人传》《孽债》《十日建国志》《新汉建国志》等。

(一二二)

爱东氏

小说创作：《五使瀛环略》

爱东氏：(未见资料。待考)

笔者未见原书。《增补新编清末民初小说目录》《晚清小说目录》等为“二十世纪小新民爱东瑾集”。《中国通俗小说总目提要》《中国近代文学大辞典》为“二十世纪小新民爱东氏瑾集”

(一二三)

嘿生

小说创作：《玉佛缘》

嘿生：(未见资料。待考)

(一二四)

血泪余生

小说创作：《花神梦》

血泪余生：(未见资料。待考)

(一二五)

惺庵

小说创作：《世界进化史》

惺庵：中国近代以“惺庵”为字、号、笔者有五人，为刘彭年、周桂笙、周钟嶽、丁惠康、徐士芬。其中徐士芬生于1719年，1848年去世，可以排除。

周桂笙(1873-1926)：上海人。名树奎、又名桂生，字云子。号新庵、古庵、辛、知新主、知新室主等。肄业于上海中法学堂。精于英语、法语。最始为《新小说》撰稿。1906年汪庆祺创办《月月小说》聘周任译述编辑，与吴趸人结为至交。同时，助李怀霜编辑《天铎报》。同年发起成立“译书交通公会”。参加南社。

周钟岳(1876-1955)：剑川金华镇人。字生甫，号惺庵、星甫，白族。清光绪癸卯(1903年)乡试解元(举人第1名)。1904年，赴日本弘文院以及早稻田大学学习。1907年回国，任云南学务公所课长，两级师范教务长。参加昆明重九起义后，历任军都督府政部参事、登庸局局长、秘书长等职。1912年，任省教育司长、滇中观察使。旋赴京任北京政府经界局秘书长。1916年，任四川督军公署秘书长。1917年回滇，历任靖国联军总司令部秘书长、代理省长、省长、盐运使、秘书厅厅长、内务司长、民政厅长、省务委员、内务厅长、通志馆馆长等职。1939年后，历任国民政府内政部长、国民政府委员、考试院副院长、总统府咨政等职。1953年，任云南文史研究馆馆员、全国政协第二届委员。

刘彭年(生卒年不详):天津人。字惺庵,光绪十五年(1889)进士,任御史。1903年为贵州副考官。

丁惠康(1868-1909):广东丰顺县汤坑镇金屋围人。字叔雅,号惺庵。福建巡抚丁日昌之子。幼随父居揭阳,受父教诲,博览家藏群书,常作诗文。20岁赴京读书,结交名流谭嗣同等,忧国伤时,研讨方略。广东总督岑春煊派其赴日本考察学校,后在广州主办学堂事务。辞职后在北京闲居,郁度晚年,逝于北京。他与湖北巡抚之子谭嗣同、湖南巡抚之子陈三立、广东水师提督安徽庐江吴长庆之子保初称为清末四公子

以上四人同有可能为《世界进化史》的作者。笔者以为以周桂笙可能性最大。

罍

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します。

大野修作 中国書人伝 長尾雨山と富岡鉄斎 蘇東坡への私淑 『書の教室』第31巻5月号2008.5.1

関 詩珮 從林紓看文学翻譯規範由晚清中国到五四的轉變:西化、現代化和以原著為中心的觀念 (香港中文大學)『中国文化研究所學報』總第48期 2008.8電字版

李 怡 『日本體驗与中国現代文学的發生』北京大學出版社2009.1

池田智恵 五十元の接吻 『新聞報』文芸副刊『快活林』「諧著」の近代性 『早稲田大學大学院文学研究科紀要』54輯第2分冊 2009.2.28

寇 振鋒 中国の『東方雜誌』と日本の『太陽』 (名古屋大學大学院國際言語文化研究科)『メディアと社会』創刊号 2009.3.31電字版

左 鵬軍 『晚清民国伝奇雜劇史稿』佻山・広東人民出版社2009.6

康 東元 『日本近現代文学翻譯研究』上海交通大學出版社2009.9 外國語言文学研究文庫

陳 清茹 『光緒二十九年(1903)小説研究』鄭州・中州古籍出版社2009.9

王 蕾 安徒生童話的翻譯与中国現代兒童觀的建立 『中国現代文学研究叢刊』2009年第5期(總第130期) 2009.9.15

薩 支山 2008年中国現代文学研究綜述 『中国現代文学研究叢刊』2009年第6期(總第131期) 2009.11.15

李楠、徐金柱 近代有多現代? “中国近代文学研究國際學術研討会”綜述 『中国現代文学研究叢刊』2009年第6期(總第131期) 2009.11.15

薛綏之、張俊才 編 『林紓研究資料』北京・知識產權出版社2010.1 中国文学史資料全編・現代卷

李 慶国 【書評】劉永文編《晚清小説目錄》台湾『漢学研究』第27巻第4期(總第59号) 漢学研究中心 2009.12

從詆毀林紓的“双簧戲”談起 五四“文学革命”疑案解析 『追手門學院大學 國際教養學部紀要』第3号2010.1.30

樽本照雄編 清末小説研究資料叢書13

商務印書館研究文献目錄

B5判 166頁 限定200部 定價:3,150円